

アボラボ 映画の冒険

アボラボ

アボラボ



第11回 中之島映像劇場

2016.2.13SAT.-2.14SUN.

PROGRAM

- A 2.13 13:00- 未岡一郎 特集
- B 2.13 15:00- 奥山順市・伊藤隆介 特集
- C 2.14 13:00- 末岡一郎 特集
- D 2.14 15:00- 能登勝 特集

上映前に作家自身
による作品解説あり

上映前に作家自身
による作品解説あり

上映前に作家自身
による作品解説あり

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

B1階講堂 / 入場無料 / 全席自由 / 先着130名
各日10:00より当日の各プログラムの整理券(1名につき1枚)を配布
各プログラムに入れ替え制

主催:国立国際美術館 協賛:ダイキン工業現代美術振興財団
協力:イメージフォーラム、日本映像学会アナログメディア研究会





第11回 中之島映像劇場

ラボ映画の冒険

日本の構造的／物質主義映画

ADVENTURE of LABO FILMS

映画制作の一連の工程において、どこまでが創造的な作業とを考えることができるでしょうか。脚本・演出・撮影・演技・録音・編集などは程度の差こそあれ、創造的作業と言つていいでしょう。ところが例えれば映写はどうでしょう。映写の善し悪しは映画鑑賞の質に決定的な影響を与えますが、映写そのものを創造的な表現行為とみなすことは通常はありません。これと同様に現像・プリントなどのいわゆるラボ・ワークも、通常は創造的作業とみなされてきていました。個人で映画制作を行う作家でも、現像・プリント作業は現像所に発注するのが一般的です。これは、多くの写真家が自ら現像・プリント作業を行うのと対照的です。現像・プリント作業に求められるのは、自然で忠実な再現性ですが、それはすなはち映画に期待される「記録」や「再現」という機能もあります。これらの工程を作家自身が行うことにより、映画が無意識的に負わされている役割から解放され、映画そのものを批評的に問いつぶ裂け目が生まれてくるでしょう。

第11回中之島映像劇場では、「ラボ映画の冒険 日本の構造的／物質主義映画」と題し、ラボ・ワークに積極的な創造性を見いだす日本の映画作家の作品を特集上映いたします。の中には、メディアとしての映画を自己言及的に扱うもの、映画の機械的システムと戯れるもの、フィルムの肌理に対するフェティッシュな感覚を示すもの、様々な傾向を見るすることができます。デジタル一辺倒の現代の映像状況の中、フィルムで制作すること、フィルムで見ることの意味を今一度見直していただければと思います。



国立国際美術館

THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

〒530-0005 大阪市北区中之島4-2-55

TEL 06-6447-4680(代表)

<http://www.nmao.go.jp/>

■ 地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」(3番出口)より西へ徒歩約10分

■ 京阪電車中之島線「渡辺橋駅」(2番出口)より南西へ徒歩約5分

■ 展覧会情報 本上映会時には以下の展覧会を開催中です。

「エッケ・ホモ 現代の人間像を見よ」、「竹岡雄二 台座から空間へ」、

「コレクション2」

会期：1月16日(土)-3月21日(月・休)

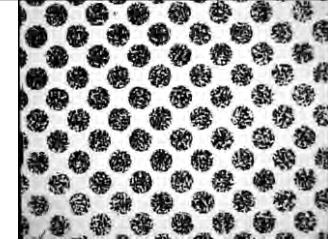
A 2.13 SAT. 13:00 - 大島慶太郎 特集

上映前に作家自身による作品解説あり

- 《POP70》(16mm、7分、白黒、サウンド、2015年)
- 《Thinking Dot》(16mm、8分、白黒、サウンド、2011年)
- 《blur(不鮮明)》(16mm、5分40秒、白黒、サイレント、2007年)
- 《Rhythmic Ray '07》(16mm、19分40秒、白黒、サイレント、2007年)
- 《FILM-FILM #4 -ROLL-》(16mm、4分30秒、白黒、サイレント、2006年)

大島慶太郎 プロフィール

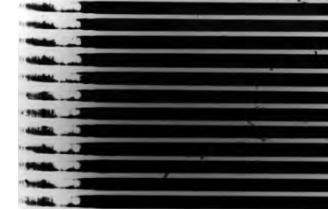
1977年釧路市生まれ。2012~2013年Kunsthochschule für Medien Köln(ケルン・メディア芸術大学)にフェローとして在籍。動画構造の解体と再構築をテーマとして映像作品の制作及び表現研究に取り組む。また、映像メディアをパーソナルな表現ツールとして据えた上映会やワークショップなどの活動も展開している。



《Thinking Dot》

B 2.13 SAT. 15:00 - 奥山順市・伊藤隆介 特集

- 《Frameless 35》(35mm、3分、白黒、サウンド、1968年)※16mm版にて上映
- 《Outrage(手ごめ)》(16mm、3分、白黒、サウンド、1971年)
- 《Frameless 16》(16mm、3分、白黒、サウンド、1971年)
- 《Le Cinéma(映画)》(16mm、5分、白黒、サウンド、1975年)
- 《我が映画旋律(My Movie Melodies)》(35mm、7分、白黒、サウンド、1980年)※16mm版にて上映
- 《MOVIE WATCHING》(16mm、12分、白黒、サイレント、1982年)
- 《漫透画》(16mm、9分、カラー、サウンド、1994年)



《我が映画旋律(My Movie Melodies)》

奥山順市 プロフィール

1947年東京都生まれ。1960年代より一貫して、映画の仕組みや構造を扱う実験映画を制作。同様のテーマのインスタレーションやパフォーマンス作品も多く発表している。日本におけるこの傾向のパイオニアにして最先端の作家。その作品はコンセプチュアルでありながら、独特的ユーモアの感覚にあふれている。

- 《Kdybych byl spion(私がスパイだったら)》(16mm、7分、カラー、サウンド、2014年)
- 《Zmluva s diabлом(悪魔との契約)》(16mm、5分、カラー、サウンド、2013年)
- 《当映画館にて上映されます》(16mm、5分、カラー、サウンド、2010年)
- 《版#19~22》(16mm、8分、カラー、サウンド、2003年)
- 《版#23(songs)》(16mm、3分、カラー、サウンド、2003年)



《Kdybych byl spion (私がスパイだったら)》

伊藤隆介 プロフィール

1963年札幌市生まれ。1992年The School of the Art Institute of Chicago(シカゴ美術館付属美術大学)大学院研究科修士課程修了(MFA)。東京造形大学でかわなかのぶひろ(映像作家)に師事し、アートフィルム(実験映画)の制作を始める。フィルムのミディアムとしての物質性、ビデオの伝達メディアとしての特性などをテーマにした映像インストレーションを主に制作。

C 2.14 SUN. 13:00 - 末岡一郎 特集

上映前に作家自身による作品解説あり

- 《КИНОФРАГМЕНТ(フィルムフラグメント)》(16mm、5分、カラー、サウンド、2014年)
- 《An Uncertain Gleam(不確定な煌き)》(16mm、6分、カラー、サウンド、2012年)
- 《Extreme Skiing in 1930(初冬の針ノ木連峰)》(16mm、4分30秒、白黒、サウンド、2011年)
- 《Vladimír Kempský's Film(ヴァジミール・ケンプスキーのフィルム)》(16mm、8分、カラー、サウンド、2010年)
- 《Portland, Oregon 1931(春ノ運動会)》(16mm、10分、白黒、サウンド、2008年)
- 《AZIZ SHAKAR LOOKING FOR JOB 2007(アジス・シャカール職探し)》(16mm、5分、カラー、サウンド、2007年)
- 《SINKING AWAY(沈み行ケル都市)》(16mm、3分、白黒、サウンド、2005年)
- 《Ein Sommer in Deutschland(独逸ノ一夏)》(16mm、6分、白黒、サウンド、2005年)
- 《Ich bin der Welt abhanden gekommen(私ハ此ノ世ニ忘レラレ)》(16mm、6分30秒、白黒、サウンド、2003年)



《AZIZ SHAKAR LOOKING FOR JOB 2007 (アジス・シャカール職探し)》

末岡一郎 プロフィール

1965年札幌市生まれ。1985年から短編映画を制作し始める。実験映画に傾向し、110作ほどの短編作品を制作。近年は、ファウンドフッテージを用い、映画史の再読をテーマに制作を続けている。また、1990年代後半からインディペンデント・キュレーターとして日本の実験映画を海外のメディア系映画祭等で紹介する。

D 2.14 SUN. 15:00 - 能登勝 特集

上映前に作家自身による作品解説あり

- 《柿》(16mm、7分02秒、カラー、サイレント、1999年)
- 《無題六》(16mm、10分、白黒、サイレント、1986年)
- 《魚の夢送り》(16mm、5分、カラー、サイレント、1995年)
- 《水からの展開》(16mm、10分15秒、カラー、サイレント、1993年)
- 《上弦の月》(16mm、16分、カラー、サイレント、2009年)
- 《夢のフランス》(16mm、6分、カラー、サイレント、2009年)
- 《光・しずく》(16mm、11分08秒、カラー、サイレント、1998年)
- 《夢代八》(16mm、9分30秒、カラー、サイレント、2012年)
- 《夢代八2014》(16mm、9分30秒、カラー、サイレント、2014年)



《光・しずく》

能登勝 プロフィール

1957年岡山県生まれ。1978年多摩芸術学園(現・多摩美術大学)を卒業し、映画制作を始める。自家現像や自家プリントで、独自の技法を駆使した映画作品を一貫して制作し続けている。その作風は流麗で、具象的イメージと抽象性、フィルム独特の肌理がスクリーン上で交差する。